

## 食と農、次代を担う若い力が、見て、語って、集った一大イベント。

日本の食糧自給率は、先進国では最低の40%。それだけでも危機的な状況だが、昨今「食の安全」をおびやかす事件が頻発している。そんな中において、未来へ向けての希望がもてるイベントが開催された。農業をめざす高校生を対象とした『農ハウ2008』高校生フェスタだ。

きりたんぼの香りが漂う中、7,000人の来場者で大賑わい。

焼きたての「きりたんぼ」や「くしもち」の香りが漂い、あちこちで直産の農作物をアピールする声がかかる。2008年8月31日、青森市の青い海公園で行われた『農ハウ2008』高校生フェスタには小雨模様にもかかわらず、7,000人の人々が集まった。

東北各県の農業高校に通う高校生たちも、プロの農家と一緒に、自分たちの作った作物を販売した。

山形県立村山農業高校では、学校で収穫したラ・フランスの缶詰やサクランボのジャムなどを販売して好評だった。また宮城県農業高校では、学校で栽培した「シモンイモ」(サツマイモの一種)のクッキーを販売して市民の関心を集めた。

ただ販売しただけではない。前者は食の安全を確保するため最新の注意を払ったことも訴え、後者は調理方



行列ができるほど人気を集めるブース

## 『農ハウ2008』高校生フェスタ』事業



元気な声で購入を呼びかける高校生たち

法や栄養成分についての情報提供なども行った。さらに食と健康に関する特設相談所も設けられ、順番待ちの列ができた。

『農ハウ2008』高校生フェスタ』は農業を中心として、「食」のありかたを総合的に見直すための実践の場でもあった。

生産者と消費者がいっしょになって新しい食と農を開拓する必要がある。

『農ハウ2008』高校生フェスタ』の主催者は東北八新聞社協議会(東奥日報社、秋田魁新報社、岩手日報社、山形新聞社、河北新報社、福島民報社、福島民友新聞社、新潟日報社)である。

今回の事務局となった東奥日報社の東京支社次長兼営業部長(開催当時、現在 弘前支社 次長兼営業部長)の西沢正雄さんは、その位置付けについて次のように語る。「新潟も含めた広域東北圏の活性化のためにさまざまな取り組みをしていますが、2006年からは3年計画で農業をテーマにした『農ハウ』プロジェクトを推進しています」これは、生産者と消費者の新しい関係とその重要性、また食育、地域づくり、観光など、農業から派生する話題を多角的にとらえて、新しいライフスタイルを創造しようという試みである。

2008年はその最終年であり、『農ハウ2008』高校生フェスタ』は総括イベントでもあった。

「未来の農業を考えたとき、それを担う高校生を招いた



各地域の名産品が食べられる模擬店は長蛇の列

イベントがどうしても必要だと考えていました」(西沢さん)

各県から招くとすると、生徒や引率の先生が休日を返上しなくてはならず、交通費などの面でもクリアしなければならない問題も出てきた。しかし、このイベントの主旨に各校とも賛同し、熱心な活動を行ってくれた。資金面でも助成を得られるなどして問題は解消されていったのである。

参加した高校生や先生からは次のような感想が寄せられた。

「他県の高校の先生や生徒と情報交換を行い、交流することができた」「販売実習を兼ねていたので教育的な効果が大きかった」「一般の出展者ブースの販売方法を間近で見ることができた」「農業高校の取り組みを皆さんに知っていただくことができた」



イベントについては主催新聞8紙で大きく報じられた

担当者より



参加した高校生たちに代わって御礼申し上げます。

東奥日報社 東京支社  
次長兼営業部長(開催当時)  
現在：弘前支社 次長兼営業部長  
西沢正雄さん

今回の助成によって、高校生たちの交通費や宿泊費などの負担を軽減することができました。会場でも高校生たちのブースは大好評で、参加校、来場者それぞれに喜んでもらえる事業になりました。

一方、高校生の参加は来場者からも好評で「高校生の積極的な接客が新鮮だった」「若い世代が農業に関わることは、日本の将来にとっても良いと思うし、イベントに活気があった」などの意見が集まった。生産者だけではなく、消費者にとっても意義のあるイベントだったようだ。今後の農業はもっと両者が情報を交換し、共同して進めていく必要があることにも気付かされたと言えるだろう。

今回の試みは日本全体を見れば小さな一歩だが、参加した高校生たちが中心となってネットワークができ、新しい農業を切り開いてくれる可能性に期待したい。東北八新聞社協議会では、今後も協力し合い、共通のテーマで相互の読者に情報を伝え合いながら、より良い地域づくりに貢献していく予定である。